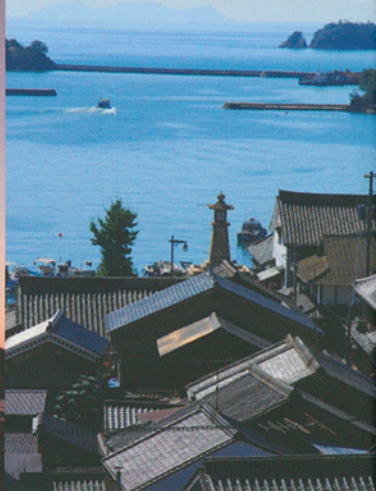




〈鞆の浦〉の 歴史保存とまちづくり

環境と記憶のローカル・ポリティクス

森久 聡



とも
鞆が鞆でなくなってしまうって思うたんよー
歴史的環境が守る〈人々のつながり〉町並み保存の社会学

瀬戸内海に臨み、世界遺産級といわれる近世の町並みが残る〈鞆の浦〉。埋め立て・架橋して道路を通すか、風光明媚な景観を守るか。まちは揺れ続けた。長年の対立、対話、裁判を経て、ついに道路建設は見送られた。なぜ人々は鞆港を守る運動に力を尽くすのか。ローカルな歴史文化、地域社会構造、政治風土と伝統、人々の記憶を背景に、鞆港保存問題の全容を解明。新曜社



〈鞆の浦〉の 歴史保存とまちづくり

環境と記憶の
ローカル・ポリティクス

森久 聡



目 次

序章——〈鞆の浦〉の歴史をたどる旅のはじまり	1
------------------------------	---

第一部 歴史保存とまちづくりへのアプローチ 7

第1章 歴史保存とまちづくり 何が問われてきたか	9
——多様な学問分野のアプローチ	

- 1 歴史的環境とは何か
- 2 「4W1H」の視点
- 3 「4W1H」の視点からみる多様なアプローチ
- 4 本書の問題関心の所在

第2章 なぜまちの歴史を保存するのか	25
——環境社会学・都市社会学・文化社会学のアプローチ	

- 1 「なぜ保存するのか」という問いかけ
- 2 「4W1H」からみる環境社会学のアプローチ
- 3 「4W1H」からみる都市社会学・地域社会学のアプローチ
——空間の社会理論と実証研究
- 4 「4W1H」からみる文化社会学のアプローチ——記憶の保存と表象
- 5 環境（空間）・記憶・政治の社会学——本書のアプローチ
- 6 鞆港保存問題の考察に向けて

第3章 地域的伝統を探る——年齢階梯制からみる地域問題……………47

- 1 地域的伝統へのまなざし
- 2 分析視角としての年齢階梯制社会
- 3 地域的伝統の民俗学・社会学研究——「村寄合」にみる話し合い
- 4 市民的公共圏論——日本社会の自生的な討論空間との接点
- 5 地域問題における〈政治風土〉

第二部 靱港保存問題に揺れるローカル・コミュニティ 67

第4章 栄枯盛衰の物語を持つ港町〈靱の浦〉……………69 ——歴史文化的コンテクスト

- 1 〈靱の浦〉の現在
- 2 潮待ちの港町・靱の繁栄——中世から近世まで
- 3 近代化から取り残されたまち——明治から昭和まで
- 4 年齢階梯制のローカリティ——地域社会の伝統と民俗
- 5 靱の浦の伝統と民俗にみる年齢階梯制

第5章 靱港保存問題をめぐる地域論争……………95 ——靱港の保存か、道路の建設か

- 1 靱港保存問題の経緯
- 2 計画凍結から行政訴訟へ
- 3 〈道路建設派〉〈靱港保存派〉の主張と争点
- 4 靱港保存問題の現在

第6章 靱港の空間・記憶・政治……………121

——靱港保存問題のローカル・ポリティクス

- 1 靱港の空間と記憶
- 2 靱港の港湾整備事業の歴史と支配層の変遷
- 3 地域指導者層による道路建設の推進
——埋め立て・架橋計画を支持する論理
- 4 「平の浦」からみる利便性——もう一つの漁港のまち
- 5 若手男性経営者層による保存運動——「靱を愛する会」
- 6 地方名望家層による保存運動——「歴史的港湾靱港を保存する会」
- 7 女性・主婦層による保存運動——「靱の浦・海の子」
- 8 「保存か開発か」をめぐる政治的実践

第7章 なぜ靱港を守ろうとするのか……………149

——「靱の浦・海の子」の事例分析

- 1 なぜ保存するのか——〔why〕〔who〕〔what〕の問題関心
- 2 「保存の論理」の分節化——〈保存する根拠〉と〈保存のための戦略〉
- 3 「靱の浦・海の子」による保存運動——4つの「保存の論理」
- 4 「靱の浦・海の子」の〈保存する根拠〉と〈保存のための戦略〉
- 5 地域社会の紐帯としての歴史的環境

第8章 「話し合い」のローカリティ……………171

——靱港保存問題にみる伝統的な〈政治風土〉と地域自治

- 1 靱港保存問題における「2つの問い」
- 2 合議制を持つ漁村社会——年齢階梯制社会における意思決定
- 3 靱の浦の地域的特質——話し合いの重要性と年長者の尊重
- 4 市民的公共圏と合議制——〈伝統的なもの〉のゆくえ

第四部 〈鞆の浦〉の歴史保存とまちづくり 187

第9章 〈鞆の浦〉の歴史的環境保存——まちの記憶の継承 ……189

- 1 鞆港保存問題の社会的解明
- 2 環境と記憶のローカル・ポリティクス
- 3 空間の保存と記憶の継承
- 4 「変化しないこと」の社会学

終章——〈鞆の浦〉の歴史をたどる旅のおわり ……203

- 1 歴史的環境保存の意味
- 2 残された疑問——なぜ埋め立て・架橋計画なのか
- 3 鞆港保存問題の解決とまちづくりに向けて

補遺 現地調査の実際——〈鞆の浦〉と鞆港保存問題の調査方法 ……217

あとがき 225

参考文献 231

鞆の浦・鞆港保存問題・まちづくり年表 730-2016 244

人名索引・事項索引 275

装幀 鈴木敬子 (pagnigh-magnigh)

図表・写真一覧

図 4.1	広島県福山市〈鞆の浦〉の位置	70
図 4.2	鞆の津絵巻	81
図 4.3	鞆の浦の町内会と伝統的な生業区分	89
図 5.1	鞆の浦の港湾遺産群と埋め立て・架橋計画地	97
図 5.2	鞆港保存問題における主体関連図	105
図 5.3	福山市が予定する伝建地区選定	107
図 6.1	鞆の浦の伝統的な生業区分と空間的位置	123
表 1.1	歴史保存とまちづくりの問題関心にみる「4W1H」	12
表 1.2	歴史保存とまちづくりへのアプローチにみる「4W1H」	21
表 2.1	歴史保存とまちづくりへの社会的アプローチにみる「4W1H」	40
表 3.1	村落構造論の指標による年齢階梯制	52
表 4.1	鞆の浦における年齢階梯制の地域的特質	92
表 5.1	〈道路建設派〉〈鞆港保存派〉住民層の特徴	104
表 5.2	〈道路建設派〉〈鞆港保存派〉のおもな主張	112
表 6.1	鞆港の港湾整備事業の歴史	126
表 6.2	社会層ごとの政治的地位、居住地区、空間的記憶	145
表 7.1	歴史的環境保存の社会学にみる「保存の論理」	166
表 8.1	鞆の浦における年齢階梯制の地域的特質と鞆港保存問題	184
表補.1	調査日程と調査対象	221
写真 0.1	鞆城址より鞆の町並みと瀬戸内海を望む	1
写真 4.1	鞆の浦の中心に位置する鞆港	71
写真 4.2	鞆の浦中心部の町並み景観	73
写真 4.3	鞆の浦の港湾遺産群	77
写真 4.4	近世の面影を伝える建造物と町並み景観	81
写真 4.5	鞆鉄鋼団地・平漁港	84
写真 4.6	観光イベントの鯛網漁	87
写真 4.7	漁師が住む江の浦町焚場	87
写真 5.1	鞆町のメインストリート	95
写真 5.2	〈道路建設派〉〈鞆港保存派〉のせめぎ合い	104
写真 5.3	離合箇所ですれ違う自動車	109
写真 5.4	裁判官の現地視察・住民向けの事業計画説明板	115
写真 6.1	埋め立て・架橋計画を推進する平町の町内会	130
写真 6.2	いろは丸展示館	134
写真 7.1	空き家の古民家・御舟宿いろは	159

序 章——〈鞆の浦〉の歴史をたどる旅のはじまり

本書の問題関心——なぜ鞆の浦なのか

人が環境を守り、環境が人を育てる——人と環境はこうした関係をどのように築くことができるのだろうか。

人間社会を取り巻く〈環境〉の一つである「都市」は、人間の営みによって日々刻々とその姿を変化させている。そして、都市的な社会生活に関わる多くの課題は、都市を開発し更新する、すなわち「変化すること」によって克服されてきた。そうしたなかで、地域に残る歴史的建造物や町並み景観の保存を訴え、「変化しないこと」を求める人々がいる。なぜ彼らは「変化しないこと」を求めるのか。それは何を意味するのか。本書の問いはここから始まる。

瀬戸内海に臨む風光明媚な古えの港町——〈鞆の浦〉。本書の舞台はこの港町である（写真0.1）。

町の中心に位置する鞆港には、近世に建造された港湾施設がほぼ原形に近い形で維持されており、町中には江戸時代に建てられた商家や土蔵が軒を連ね、往時の面影を偲ばせる町並み景観が残されてきた。町の中心にある鞆の港は、江戸時代に瀬戸内海貿易で大きく繁栄した歴史を持つ。そして近世の鞆商人によって改修された往時の姿がそのまま残され、階段状の護岸である「がんぎ雁木」、港に出入りする船を案内する「じょうやとう常夜燈」、船体の補修をする「たてば焚場」、防波堤の「おおはと大波止」、そして港を監視

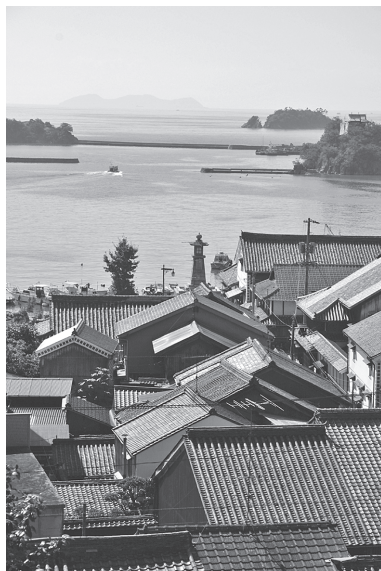


写真0.1 鞆城址より鞆の町並みと瀬戸内海を望む（2008年10月撮影）

する「^{ふなぼんしよ}船番所」といった港湾施設が現存している。さらに当時の商家や民家、当時の建築様式を引き継いだ住宅に住み続ける人々も多く、江戸時代の港町の風情を味わうことができる。

このように靱の浦は、一見ゆったりと時間が流れる港町のように見えるが、30年以上にわたって、地域住民の間で争点となり、現在も続いている一つの問題がある。それは、靱港の湾内を埋め立てて架橋し、県道を建設する計画（事業名称「靱地区道路港湾整備事業」、以下、埋め立て・架橋計画と略記）をめぐる地域問題である。1983年に福山市と広島県は埋め立て・架橋事業を計画決定したが、地域住民はこの計画をめぐる意見が分かれた。事業主体として道路計画を進める広島県と福山市、そして計画を支持する地域住民は〈道路建設派〉として、一方で埋め立て・架橋計画を中止して、靱港の現状維持と歴史的な町並み景観の保存を主張する住民は〈靱港保存派〉として、賛否が分かれた。〈靱港保存派〉には国内外のさまざまな遺産保存団体や学術団体なども加わり、埋め立て・架橋計画の中止を訴えてきた。このように、靱の浦の内外に至るまで、埋め立て・架橋計画の是非が争われてきたのである（本書では「靱港保存問題」と記す）。

〈道路建設派〉と〈靱港保存派〉の主張は真っ向からぶつかってきた。

埋め立て・架橋計画を推進する行政当局と〈道路建設派〉の住民は、道路建設によって交通渋滞の解消や緊急車両の通路の確保を図ろうとしている。また現代の船舶には江戸時代の港湾施設は不要であり、実際に靱港で積み荷の揚げ下ろしをすることはほとんどない。そこで近世の港湾遺産を移設し、利用されなくなった古い港を道路に造り替えて生活の利便性を高め、同時に観光開発に活かそうというのだ。

一方、〈靱港保存派〉の住民は反論する。港を埋め立てて道路を建設することは、騒音や排気ガスなどの悪影響があるだけでなく、学術上価値の高い、世界的な歴史文化遺産を破壊する。そのうえ、観光資源である港町の町並み景観の魅力をかえって減少させるに違いない、と。

〈道路建設派〉も〈靱港保存派〉も自らの主張をもとに、それぞれ署名活動や行政当局への陳情などを行ってきた。そして2007年4月に〈靱港保存派〉の住民が原告となり、埋め立て・架橋事業の行政手続きを差し止める訴訟が起こされた。2009年10月、広島地裁の判決が下り、広島県知事に行政手続き差し止めを命じたことは、全国紙の一面で画期的判決として報道された。

序章 〈鞆の浦〉の歴史をたどる旅のはじまり

この背景には、時代遅れとなった大型の公共事業が見直されず進められることに世論の批判が高まっていたことがある。長年にわたり無秩序な開発政策に抵抗してきた全国の町並み保存運動に、歴史的勝利と受け止められたのである。この判決を受けた広島県は控訴したが、両派住民が参加する住民協議会を経て2016年2月、県は計画断念を正式に表明した。原告は訴えを取り下げ、この問題は一つの区切りを迎えた。

鞆の浦の〈道路建設派〉と〈鞆港保存派〉の主張が真っ向から対立するのと同じように、私たちも「歴史的な町並み景観の保存か、地域開発か」について、考え方が二分されがちである。開発支持の立場からは、古い建物を更新することは、都市の発展において「当たり前」ではないか、そうしないと都市は死んでしまう、と考えるかもしれない。しかし、だからといって、保存運動は都市の発展を阻害するとか、単に古い物が好きなレトロ趣味のエゴイズムと決めつけるのは早急である。その前に私たちは次のように問わなければならない。「なぜ保存運動はその『当たり前』に抵抗して、古い物を保存しようとするのか」と。そうすることで、私たちは政治的な対立や都市再開発の「当たり前」から一定の距離をとって都市の現実を見つめ直すことができるのである。

おそらく本書における鞆港保存問題の社会学的な分析を通じて、私たちは都市が変化することを都市の発展と捉え、それに無批判にプラスの価値を与えていたことに気づかされるだろう。そして古い町並みを好むかどうかは別にして、少なくとも価値を見いだす人々の存在を認め、そのことの意味を真摯に問うこと。ここに歴史的環境保存の社会学の課題がある。

鞆が鞆でなくなってしまうって思うたんよー

鞆港保存運動のリーダーである女性は、埋め立て・架橋計画に反対して古い町並み景観の保存運動に取り組む理由をこのように話す。この言葉は、地元住民にとってどのような意味を持つのか。そして彼／彼女らが鞆の浦の歴史保存とまちづくりに込めた想いとは、どのようなものののだろうか。

本書の構成——何を問うのか

以上のような問題関心を出発点に、本書は4部から構成される。

第一部では、本書の問題関心を明確にするために先行研究を整理して、本書の視点、歴史保存とまちづくりへのアプローチが説明される。第二部では、鞆の浦と鞆港の歴史を概観したうえで、鞆の浦の地域的伝統と政治風土を明らかにする。第三部では、本書の問題関心と視点に基づいて、鞆港保存問題の経緯と現状の実証を行う。そして第四部では、第三部までの議論と事例分析を通じて得られた知見を総括する。最後に資料編として、参考文献と鞆の浦と鞆港保存問題に関する詳細な年表を付した。

第一部第1章では歴史保存とまちづくりをめぐる多様な学問的アプローチから、問題関心の所在と主要な研究蓄積を概観する。歴史保存とまちづくりの研究には、理工学分野の建築史・都市計画論、社会科学分野の法学・行政学、人文科学分野の都市論、そして社会学では環境社会学、都市社会学・地域社会学、文化社会学のアプローチがある。これらの特徴を[Why][Who][What][When][How]で構成される「4W1H」の視点から整理し、これらの学問分野のアプローチとの異同を通して、本書の問題関心の所在を明示する。

第2章では、[Why]「なぜ保存するのか」[Who]「誰が保存するのか」という社会学的問いかけをもとに、歴史的環境保存の社会学、空間の社会理論とその実証である都市社会学の系譜を辿り、第6章へ続く空間と集合的記憶の社会学のアプローチを提起する。一連の先行研究の検討によって、本書の学問上の位置づけと社会学的な系譜を述べ、〈環境・記憶・政治〉という本書の分析軸を示す。

第3章では、鞆の浦の地域的伝統への問いかけをもとに、社会人類学・民俗学における村落構造論の年齢階梯制研究、環境社会学における市民的公共圏論、村寄合などの民俗学的研究を援用して、第8章へ続く地域の伝統と〈政治風土〉の解明に取り組む本書の社会学的方向性を示す。

第二部第4章では、鞆の浦の歴史を振り返り、鞆港保存問題がどのような歴史文化的コンテクストに位置づくのか、地域の伝統の内実に迫ってみたい。鞆港が経てきた歴史的変遷を万葉集の和歌に始まり、中世から近現代まで辿ることは、問題を理解する重要なファースト・ステップである。ただし、これはあくまで予備的な基礎知識である。むしろ重点は瀬戸内海沿岸に存在し

たとされる「年齢階梯制社会」の特徴から、鞆の浦の地域的伝統を探ることにある。

第5章では、現在まで30年近くこの地域で争点化している「鞆港保存問題」の経緯を描く。埋め立て・架橋計画の発端から訴訟の取り下げまで、「鞆港の保存か、道路建設か」をめぐる揺れる鞆の浦の住民層と意見対立の詳細を論じる。ただし住民はさまざまな社会関係が織りなす地域社会を生きしており、そこでは法廷のように明確な形で意見対立が可視化されるわけではない。ここではあくまで法廷の内外で対立する争点を扱い、次章以降の実証分析において、法廷の場に浮上しない曖昧な立場や沈黙も含む、住民間の対立軸を明らかにしたい。

第三部第6章では、鞆港保存問題の争点が個人の価値観や集団の利害関係ではなく、地域住民に参照される「空間的記憶」にあることを明らかにしたい。そのために、ルフェーヴル・カステルの空間論を下敷きに、〈道路建設派〉・〈鞆港保存派〉の人々がおもに所属する5つの社会層を分節化し、鞆の浦の地域社会構造と各社会層の社会経済・政治的地位の変遷を視野において、対立する主張や戦略の違いを読み解いていく。

第7章では、鞆港保存問題において大きな働きをした運動団体「鞆の浦・海の子」に着目する。「海の子」の事例分析を通して、歴史的環境とは地域社会にとってどのような意味を持つのか、社会学的解釈を加えて根源的な議論を深める。「海の子」リーダーやメンバーの語りには、〈鞆港保存派〉の空間的記憶の表象である鞆港が、鞆の浦にとってかけがえのない存在であるとの確信がうかがわれる。伝統を引き継ぐ地域社会の存立条件として、歴史的環境が必要不可欠であり、地域社会の紐帯であることが理解されるであろう。とくに「海の子」の観察データから、保存の論理を「保存する根拠」と「保存のための戦略」の2つに分節化する必要性とその利点を導き、歴史的環境保存の社会学の先行業績にみる保存の論理を検証する。

第8章では、「地域住民はなぜ話し合いにこだわるのか」「なぜ年長者の意見をとりわけ尊重するのか」という2つの問いを手がかりに、再び地域的伝統としての年齢階梯制社会と「合議制」に着目する。鞆港保存問題は何を意味するのか、鞆の浦のローカルな〈政治風土〉と地域自治を考察する。

第四部第9章では、各章の議論の概要とともに、現地調査の成果を総合してどのような知見がもたらされたかを振り返る。本書がとくに「海の子」の

保存運動に着目した理由とは何か。彼／彼女らが歴史遺産としての鞆港の学術的・歴史的評価よりも、港町として維持されてきた鞆の浦の共同性・社会的連帯を重視する意味をさらに掘り下げる。

終章では、本書では検討できなかった論点を含めて、今後の研究上の展開可能性に触れて結論としたい。そして最後に、本書の考察が、現在進行形の鞆の浦のまちづくりの問題解決にどのように資するか、大局的な視野からのコンセプトを述べたい。

補遺では、鞆の浦における社会調査とデータ収集の方法を述べ、本書が依拠する現地調査の実際を補足説明しておきたい。

第一部 歴史保存とまちづくりへのアプローチ



第1章 歴史保存とまちづくり 何が問われてきたか

——多様な学問分野のアプローチ

1 歴史的環境とは何か

風土と町並み

人間社会を取り巻く気候や地形、資源などの自然環境を一般に風土というのが、風土はその地域固有の生活文化にさまざまな影響を及ぼしている。たとえば、海の幸が豊富な海沿いで漁業が生業として成立するとともに漁村や漁師町が形成され、それに適した社会構造や漁師たちの生活文化が生まれる。あるいは、石炭層の上に炭鉱町が形成され、そこで働く炭坑夫たちの生活文化が生まれる。このように、海や川、石炭資源といった自然環境が、その地域固有の産業の発展や歴史文化を生み出す条件となっている。つまり、自然条件が社会の成り立ちを規定するのだ。

しかしながら、自然環境だけが人間の生業を成立させるのではない。最初の自給自足社会から一定程度の貨幣経済が発展すれば、より広い社会経済的条件が生業を発展させることになる。先のたとえを引き続けば、魚を売買する市場が成立し機能しなければ生業として漁業を営むことは難しいだろう。また石炭産業が生業として成立するためには、石炭需要がなければならない。その社会が石炭を主要燃料とするからこそ、石炭の取引が活発になされ、炭鉱町は活気づくのである。市場という経済的条件によって生業が成長することで、その集落は漁師町として、あるいは炭鉱町として発展し、生業に応じた独特の地域コミュニティが形成され、それが町並みに反映される。

しかし、それは決して安定したものではなく、生業と地域社会を取り巻く社会変動によって容易に変化していくのである。漁業の衰退に伴って、漁師町から近隣都市のベッドタウンへ変貌する港町は少なくない。また炭鉱町

は石炭を主要燃料とする時代に大きく繁栄したが、石炭から石油へのエネルギー革命によって石炭需要が激減すると、石炭産業は急速に衰退していった。採算の取れなくなった炭鉱が閉山されると、炭坑夫とその家族が生活した炭鉱住宅や坑道の入口にあった立坑櫓などは取り壊された。こうして炭鉱町としての町並みは失われていく。このように町並み景観とは、その地域固有の経済、政治、社会の集合行為の帰結として生み出されるといえるだろう。したがって、風土や町並みを切り口にして、地域社会の実態を解明することができる。すなわち、風土や町並みは地域社会の観察可能なインデックスに十分なりうるのだ。

民俗学者の宮本常一が、上空から瀬戸内海の島々を観察するために、機内から眼下に広がる集落を見て次のように述べたことは、本書と共通するところがある。

歴史は記録や遺物や生活伝承の中にあるばかりでなく人文景観の中に法則と秩序をもって存在しているのである（宮本，[1965] 2001: 717）

歴史的環境の保存——「変化しないこと」への問題関心

本書が取り上げるのは、「歴史保存とまちづくり」をめぐる問題である。ここでいう歴史保存の問題とは、歴史的建造物や町並み景観などの文化・学術的価値判断だけでなく、歴史遺産として保存することが地域社会の生業（経済・社会構造）、文化（記憶・規範意識・価値観）、政治（地域自治）に影響を与える問題をさす。地域社会のゆくえを住民自らの意思によって決める、いわゆる「まちづくり」において、歴史的建造物や町並み景観を保存することは、どのような社会的意味があるのかを問うことと、換言できるだろう。そしてこの問題設定のもとで、建築史・都市計画論、法学・行政学、都市論などさまざまな学問分野において研究が蓄積されてきた。本書はそのなかで、社会学の立場から歴史保存とまちづくりの問題にアプローチするものである。

社会学において、歴史保存とまちづくりに関する問題は、とくに環境社会学のなかで「歴史的環境保存の社会学」として位置づけられている。ここでいう歴史的環境とは、昔から残る町並み景観や建造物や遺産などのように、「社会的・文化的につくられてきた環境」のなかで、「特に長期間にわたって

第1章 歴史保存とまちづくり 何が問われてきたか

残ることによって、一定の価値をもつとみなされるようになったもの」(片桐, 2000: 1) である¹。このように自然環境だけではなく、社会的・文化的に形づくられてきた環境も対象におき、環境と人間社会の関係を問うことは、日本の環境社会学の一つの特徴である。また、近年では環境社会学だけではなく、文化社会学においても博物館や資料館などにおける集合的記憶の保存と展示といった観点から、歴史保存に関する研究が増えている。

このように日本の社会学において風土や町並み景観に関する議論は、環境社会学を中心に組み立てられており、一定の層を成してきたといっていよう。第2章で詳述するように、環境社会学は環境と人間社会の関係の学として風土や町並み景観の社会的意味を探究してきた。そして地域固有の歴史や風土が生み出す町並み景観を「歴史的環境」と定義し、その保存運動を事例に、まちづくりや都市のアイデンティティを読み取る試みが積み重ねられている。こうした歴史的環境保存の社会学は、発展あるいは衰退によって変化していく都市や地域社会の実態を調査してきた都市社会学・地域社会学に対して、「変化すること」ではなく、「変化しないこと」から捉えようとする学問的挑戦といえよう。

多様な学問分野のアプローチ

これまで、歴史的建造物や町並み景観の保存と地域再生・まちづくりの問題は、建築・都市計画論の工学分野をはじめ、法学や行政学、社会学など社会科学においても研究が積み重ねられてきた。さらには、政治哲学、歴史学、民俗学の空間論として人文科学も関わってきた。歴史保存とまちづくりは一つの社会現象として、多様な学問領域からのアプローチが考えられる。そこでまず工学分野も含む諸科学全般にわたる先行研究を大きく整理し、それを踏まえて社会学によるアプローチを対比したい。

工学・社会科学・人文科学分野にわたる多様なアプローチを検討することで、各分野の研究位相を示すだけでなく、各分野のアプローチの利点と可能性を明らかにすることができるであろう。このことは本書の問題関心の方向性・志向性を定め、さらに本書の位置づけを明確にする上で有益だろう。言い換えれば本章の目的は、歴史保存とまちづくりにアプローチする学問分野の見取図を示すことであるといえるだろう。

以上のような意図から、各分野の学説の系譜に沿って先行研究を検討する